

人材が支える中国経済の発展



宮内 雄史 (みやうち ゆうじ)
東京大学北京代表所 所長

三菱商事(株)では中国室長、日本貿易会への出向時には、社会貢献グループ部長、また当会が設立した国際社会貢献センターの事務局長を務め、現在は、東京大学北京代表所所長の宮内雄史氏に、最近の中国経済の発展状況について、現地で感じるところをお伺いした。

1. 中国の発展を支える人口要素と人材

金融危機に端を発する世界経済の低迷下において、中国は輸出の減少で大きく打撃を受けているわけであるが、その中であって、住宅、自動車の販売が大きく伸びている。優遇策の効果も一部はあろうが、2009年1-9月の自動車販売は前年比34%の大幅増となった。年間の販売台数は1,300万台に達し、米国を抜いて世界のトップになると見られている。中国経済が輸出依存型経済で発展してきたといわれる中で、そして輸出が大きく落ち込む中で、この大きな伸びを説明することは難しい。

そこで、中国が持つ内在的な発展要因とは何だろうか、何か見落としていないかと考え、人口要素と人材に注目する必要があると考えた。

2. 中国のベビーブーム

現在、中国の人口は約13億人、年間出生者は1,600万人程度であるが、戦後3回にわたるベビーブームがあった。

第1回目は、戦後の混乱が静まった1950年か

ら政治運動などが盛んに展開されるようになる1954年ごろの5年間。1950年の全国人口は5.5億人であったが、5年間で毎年平均約2,000万人の合計1億人が生まれている。

第2回目は、自然災害が終わった1962年から文化大革命を経て、人口問題が初めて政府の政策として取り上げられ、産児制限の体制が取られる1973年までの12年間。1962年の人口は6.7億人であったが、毎年平均2,600万人の合計3.1億人が出生した。1973年の人口は8.9億人に達した。

第3回目は、厳しい産児制限下ではあったが、第2回目のベビーブームの巨大な人口が適齢期に達したことから、1985-93年の9年間、毎年平均2,300万人の合計2億人が出生し、1995年に人口は12億人に達した。

3. 第2次、第3次ベビーブーム世代

今、第2次ベビーブームの巨大な人口は、年齢的には36-47歳となっており、文化大革命中も含めて基礎教育の拡充が図られた中で育った特徴を持つ。この、働き盛りで、しっかりとした家族を持つ世代に、1.4億人ほどの中高卒レ

ベルの人々がいる。また、大卒者も650万人に達し、社会各分野でリーダークラスを形成しつつあると見られる。

この間の経済発展で一定の収入や蓄財を得たこの第2次ベビーブーム世代の層が、住宅や自動車購入層の一つの中核を成しているのではないかと推測される。そうであれば、これらの需要は相当に奥が深いものであると言えよう。

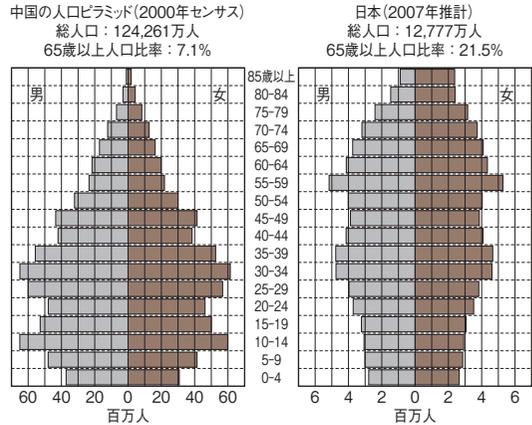
さらに、第3次ベビーブームの世代は、今、まさに社会に出つつある。この層の特徴は、大卒者が急増したことである。2009年に大卒者は600万人を超えた。今後10年間で6,000~7,000万人もの大卒者が生まれていく。若い知的労働者、若い消費者層を構成し、従来とは異なる社会現象を作り出していく可能性が高い。

4. 就業問題と自動車関連産業

他方、中国で自動車販売が伸びていることは、景気回復やGDPの伸び率を支えるとの点で理解される以上に、巨大な社会的、経済的な意味を持つと思われる。

自動車産業は、部品・材料を含めた開発製造、その原料となる鋼材、プラスチック、非鉄金属、ゴム、ガラスなどの関連製造業をけん引する。それだけではなく、自動車販売に関連する、広告、イベント、金融、保険、修理・点検、カー用品、中古車販売。また、ガソリンスタンド、ドライブイン、駐車場、郊外型ショッピングセンター、アウトレットモール、観光開発、別荘開発、キャンプ施設などの建設も進むこと

人口ピラミッド



になる。それは、巨大なサービス産業の誕生を意味する。

現在、大卒者や農村から都会へ移動する青年層の就業難が、中国の最大の課題の一つとなっている。大卒者の就職難は、今世紀に入って大学生が急増していることが主因であるが、今年の卒業者が約600万人、昨年度就職できなかった約100万人を合わせて職を求めているが、200万人程がワーキングプアの状態になっていると見られる。

この問題が、自動車関連の多様なサービス産業の誕生と発展で、ひとつ今後、どれほど吸収されていくか。安定した中国の経済発展にとって、かつてない大きな意味を持つことになるのではないかと注目している。

(2009年10月26日)

聞き手：広報グループ 山中) JF TC

(こぼれ話) 砂漠化防止と農業

最近、中国では、古来より滋養強壯の食品として、薬膳には欠かせないクコの実が好んで食されるようになった。クコの実は、砂漠地と農地の境目辺りで収穫できることから、砂漠化の防止に大いに役立つ。そのクコの実が全国的に売られたことから、農民がこぞって生産に励み、生産地の甘粛や内モンゴル辺りには、大規模生産で大変豊かになっている農家もでてきている。もう一つ、柳科の沙柳という灌木があり、3年で2mほどに成長して枯れる。これが大変よいまきとなる。この灌木も砂漠地で育つことから、砂漠化の防止、緑化に役立つ。このまきを発電所が燃料として買い上げ始めたことから、農民がこぞって生産に励みだした。また、枯れる前の生木は製紙原料にもなる。砂漠化の防止には一般的な植林だけでは難しい面があり、やはり産業として成り立つことが持続的な活動につながる。最近では、北京も砂嵐が少なくなり、砂漠化の報道は減っているが、このような背景もあった。